〔文献紹介〕

Hinrich Fink-Eitel, *Dialektik und Sozialethik: Kommentierende*

Untersuchungen zu Hegels „Logik“,
Verlag Anton Hain, Meisenheim
am Glan, 1978

ヒンリッヒ・フィンク・アイテル『弁証法と社会
倫理学——ヘーゲル「論理学」への注釈的研究
——』アントン・ハイン出版社、マイゼンハイ
ム・アム・グラン、一九七八年

嶋 崎 隆

I

従来、数多くのヘーゲル論理学・弁証法の注釈書、一般的研
究書が書かれたし、また最近その傾向が強くなっている。本書
をとり上げる理由は、そのなかでもこの著作がもっとも注目す
べきものの一つだからである。まず第一に、難解をもって知ら
れるヘーゲルの論理展開を厳密に、しかもきわめて簡潔に説明

している点で、本書はすぐれている。第二に、本書は、マルク
ス、フランクフルト学派等の研究を通じて政治的・社会的問題
に深い関心をよせている点でも、ヘーゲルをいかに読むかに
ついて注目すべきものをもっている。著者ヒンリッヒ・フィン
ク・アイテルは、西独のザールブリュッケン、ミュンヘンおよ
びハイデルベルクで哲学、ドイツ語、ドイツ文学、英語英文学お
よび社会学を研究してきており、現在、ハイデルベルク大学に
勤務している。彼はヘーゲル研究者として知られるヒンリッヒ
(D. Henrich) きよむ・トイニッセン (M. Theunissen) の指導
をうけてきた。

本書の構成は以下のとおりである。

諸論 (Einleitung)

A 無関与性の理論

否定の類型論として叙述された、「外的偶然」の論理学と
しての有の論理学

B 威力 (Macht) の理論

「内的偶然」の論理学としての本質の論理学

C 論理外的論述 (Logikexterne Diskurse)

D 暴力 (Gewalt) の理論

本質論理学の終局と概念の導出 自由の発生

E 自由論の輪郭

概念の論理学

「結論」では著者の立場、方法論および展望について述べら

れる。Aは有論、BとDは本質論、Eは概念論に各々、対応する。そして有論に五〇頁、本質論に九〇頁、概念論に三〇頁がさかれており、本質論に力点がおかれている。しかも本質論の叙述の大部分は反省 (Reflexion)・反省諸規定論にかんするものである。しかし、有論、概念論の叙述に対しても力は抜かれていない。Eでは、「心理テスト」に簡単に触れたあと、『資本論』等、マルクスの経済学批判と論理学の関係について論じられており、これも興味深い箇所である。

II

ここではおもに、著者の政治的立場、ヘーゲル論理学に対する方法等について論ずる。著者は「序言 (Vorwort)」で従来へのヘーゲル研究の態度を以下のように批判する。

「このようにしてヘーゲル哲学は、ヘーゲル哲学との同一性を失うのでないかという眩惑と不安のために『内的なもの』の絶対化を通じて殺されてしまい、あるいはヘーゲル哲学の勢力圏内で自己を失うのではないかという無知もしくは不安のために『外的なもの』の絶対化を通じて殺されてしまったのである。」(S. 2)

ヘーゲルにまともにとり組んだ者ならば、この発言の深刻さが実感されるのではないだろうか。ヘーゲル哲学の価値を理解するにはそれに徹底して内在するほかはないけれども、たんに内在しヘーゲルと合体しているだけでは彼の思想を現在に生かすことはできない。他方、ヘーゲル弁証法の魔力と思弁を危険

視してヘーゲルの論理と思想に踏みこまないならば、もとよりその価値は理解しえない。このようなパラドックスは毀誉褒貶の激しいヘーゲル哲学に対してもっともよく妥当する。それでは著者はどのようにヘーゲルにアプローチするのか。著者は、一方では、「論理的 (logik-intern)」・「体系内的 (system-intern)」立場から徹底的にヘーゲル論理学の展開を探索し再構成しようとし、他方では、「論理的 (logik-extern)」・「体系外的 (systemextern)」立場からヘーゲル論理学を実践的社会理論として読みこもうとする。そしてそのうえで、両側面的結合をはかろうというのである。このさい、前者の側面は解釈学的立場から行なわれ、後者の側面はマルクスの経済学批判と密接に連関させられる。

さて、「論理的」アプローチは「歴史的視点」(S. 3ff.)および「体系的視点」(S. 14ff.)から行なわれる。前者については言え、著者の政治的関心はきわめて高い。著者は結局、「マルクスレーニン主義的正統派」(ソ連)と「西欧共産党の修正主義」をともに批判し、ルカーチ (G. Lukacs)・「コルシヤ (K. Korsch)・ホルクハイマー (M. Horkheimer)らの「批判的マルクス主義」に共感を寄せる。そして「批判的マルクス主義」は、ヘーゲル哲学によってマルクス理論を再生させるという意味で、哲学的には「ヘーゲル・マルクス主義 (Hegelmarxismus)」だと説かれる。「体系的視点」について一言すれば、著者は、ヘーゲルの意味の「概念」とは「間主体性 (Intersubjektivität)」であるという立場に立ち、ヘーゲルの思弁的弁証

法を「間主体的関係の論理学」として読もうとする。そしてこれを「社会経済的事象関係の論理学」の根底におこうというのである。

「論理内的」アプローチでは、ヘーゲル論理学が(1)記述的理論か、(2)構成的理論か、(3)意味論的理論か、(4)レドリックの理論か、等さまざまな問題設定をしながら、自らの立場を決定していく。著者によれば、ヘーゲル論理学は閉じた意味論、それも内包的意味論——言葉の言語内の意味を分析する——の枠内における構成的理論であり、そこでは衝突(矛盾)の内的克服によって意味体系が展開されていくのである(S. 21)。

著者は「批判的マルクス主義」を哲学的には「ヘーゲル・マルクス主義」と規定したが、従来、ヘーゲル・マルクス関係は大きな問題であった。この点では、本書の問題意識は、「ヘーゲル理論とマルクス理論の境界をのりこえる、『間主体的関係の論理学』という問題連続」(S. 157, 162)の探求にある。この問題意識が欠けると、ヘーゲル理論とマルクス理論が分断され、たんに一方の他方への「適用」あるいはマルクスによるヘーゲルの「転倒(Umstüpfung)」が言われることになる(これは「マルクス・レーニン主義的正統派」への批判である)。

ヘーゲル哲学が自然と社会の統一体を境域として主体—客体の動的関係を体系的に探求する以上、ヘーゲル論理学を「間主体的関係の論理学」と読むことは有意義である。だが、議論を先どりすると、「論理外的」立場と「論理内的」立場の内的統一を説く著者の方法は、解釈学的立場と実践的社会理論を外的

に並置する感を免れえないし、さらにまた、ヘーゲル論理学を現代的立場から、それが記述理論か、構成理論かと、あるいはそれが存在論か、一種の形式論理学か、超越論的論理学か、等(S. 20)と問うことは、その問題設定自体が無理だという気がする。というのは、ヘーゲル論理学は存在論的側面と思维法則的側面の統一なのであり、形式論理学、超越論的論理学、弁証法的論理学相互の歴史的發展関係もまた考慮されるべきであるので、単純な二者択一が妥当しないからである。そしてまた、ヘーゲルとマルクスの「問題連続」を洞察することは重要ではあるが、その場合、ヘーゲルが観念論によってのみ現実認識を遂行したことも事実であるし、マルクスの継承は観念論から唯物論への弁証法的転化を伴ったのであるから、このことを考察の対象に入れなければ、一面的・抽象的な認識になるであろう。だが、それにもかかわらず、著者の考察には多くのすぐれた点がある。これを以下にみよう。

III

「間主体的関係の論理学」と規定されたヘーゲル論理学についてより具体的に考察する。著者は「間主体性(Intersubjektivität)」のもとで、一方では、一者が他者と結ぶ私的な関係を理解し、他方では、社会的諸グループ・諸階級間の関係を理解している(S. 154)。そして「間主体的関係の論理学」のもとで、話し認識し行動する主体が相互に結び合う諸関係の知的性格の分析が理解される(ibid.)。言うまでもなく、Intersub-

「ektivität」と言えば、フッサール (E. Husserl) を想起するが、著者のいう Subjekt とは、「人間とは社会的諸関係の総体である」というマルクスのテーゼにおける「人間」に近いので、「間主體性」と訳したのである (著者はフッサールにはほとんど触れていない)。

それでは、著者はヘーゲル論理学の展開 (有・本質・概念) をどのように捉えようとするのか。

周知のように、大論理学は「客観的論理学」(有論・本質論)と「主観的論理学」(概念論)に区分される。著者によれば、「客観的論理学」は「たんに存在の論理学、物的関係様式の論理学ではなくて、また(主體性の)物一化の論理学 (eine Logik von Verdinglichung) (S. 144) と解され、その物化の状態を克服した「主観的論理学」は「自由論」と解されるのである。

有論は「無限関与性の理論 (Theorie der Gleichgültigkeit)」、「外的偶然の論理学 (Logik äußerer Kontingenz)」と規定され、そこでは外的反省によって「無限背進 (der infinite Regress)」が生ずる。我々はここで、「或るもの」が「他のもの」からの関与(関係)なしに存立しており、「或るもの」は偶然的に「他のもの」に移行するだけにすぎず、またこの事態が有限者と無限者の「無限累進」に展開する、といった有論の基本認識を想起できる。本質論は「内的偶然の論理学 (Logik innerer Kontingenz)」と規定され、一般に「非対称 (Asymmetrie)」と「不十分性を含み」、「反省の循環 (Zirkel der Reflexion)」

というディレンマに陥る。本質論では、「無限背進」はやむけれども、その代りにこの矛盾を内部に抱えこむことになり、それは「本質関係の内的緊張」(S. 155)として現われる。「反省」におけるディレンマ・矛盾については、「反省の他者が反省自身であるならば、反省は自己をその規定性において循環的に前提する」(S. 90)と指摘される。この本質論の不十分性はさらに、「実体」章における「威力 (Macht)」と「因果性」章における「暴力 (Gewalt)」の段階に区分される。「間主體的関係の論理学」としてのヘーゲル論理学では、以上の「客観的論理学」は人間社会の疎外された状態の叙述であり、この暴力的必然性を克服し自由をかちとるのが概念論の段階である。概念論では「対称 (Symmetrie)」が回復され、相互承認状態が完成されるのである。

ヘーゲル自身はたとえば、有論を「外的偶然の論理学」、本質論を「内的偶然の論理学」と一般的には規定してはいないけれども、以上の著者の把握はヘーゲルに即していると言えよう。また以上のように考えると、「客観的論理学」と「主観的論理学」の区分が大きな意味をもつことになるが、周知のように、小論理学ではこの区分が捨てられて、たんに有・本質・概念の三分があるのみである。

IV

解釈学的立場からの「論理内的」な展開における最大の特徴は、難解で錯綜したヘーゲルの論理をきわめて簡潔に定式化し

ていることであり、哲発されることが多い。ヘーゲル研究書を読んでもしばしば感ずることは、研究者がヘーゲル自身と同じ言葉とスタイルで表現するので——時としてヘーゲルの引用で何となく説明に代えられたりする——、結果としてヘーゲルの理解があまり進まないということである。しかし、著者の場合、ヘーゲルにかなり内在しているにもかかわらず、このような欠陥が十分に克服されているように思われる。著者の使う手法の一つは、論理展開を簡潔に図式化することであり、もう一つは、ヘーゲルが同一のカテゴリー・概念に数種の意味をもたせていることを明示するために、1、2、3、……と「指標」を使用していることである。

以下、大論理学冒頭の「有 (Sein)」と「無 (Nichts)」の弁証法を例にとろう (S. 36—40)。

(1) 「純粹有と純粹無は同一である。」

$$S \equiv N$$

(2) 「だが同様に、両者は絶対的に区別されている。」

$$S \neq N$$

(3) 「成 (Worden) は、有と無が同一であり、かつ同一でないことである。」

$$(S \equiv N) = (S \neq N)$$

(3)の段階で決定的な「意味転位 (Bedeutungsverschiebung)」がある。有と無はもはや直接に存在するものではなく、成も諸関係の関係である。

$$(S \equiv N) = (S \neq N)$$

$$S \equiv N$$

(4) 有とは無への移行であり、ここに「消失 (Vergehen)」がおこり、また無とは有への移行であり、ここに「発生 (Entstehen)」がある。

$$S(S \rightarrow N) \rightarrow N(N \rightarrow S) \rightarrow$$

(5) 有は無へ移行するが、無は有へ移行する。このようにして、有は自己に合致する。同様に、無も有をへて自己に合致する。

$$\begin{array}{ccc} S(S \rightarrow N) \rightarrow N(N \rightarrow S) & & N(N \rightarrow S) \rightarrow S(S \rightarrow N) \\ \leftarrow S & & \leftarrow N \end{array}$$

以上は著者の説明の骨子を取り出しただけであり、さらに詳しい注釈がついてゐる。このような図式的説明は直観的明瞭性という点で利点をもっている(もっとも論理的厳密性に代替はできないけれども)。

著者は「指標」をも多用する。たとえば、「他者 (das Andere)」について三種を区別している。「他者」¹は「本質が内包してゐるところの他者」(S. 86)であり、「他者」²は「自己であるものとしてのそれ」と関係するところの他者 (ibid.) である。これに対して、「他者」³は、主体の外にまったく自立的に存在するものとしての他者であり、その意味で主体の自己関係の枠外にある他者である。勿論、著者は、以上の三種の他

者をばらばらに提示したのではなくて、三者の間に密接な連関と「意味転位」を考えており、「他者」も結局、「他者」³から生じたと主張する。著者は、三種の「他者」および二種の「自己」関係を使用し、かなりの程度、難解な「反省」の論理を再現することに成功しているように思われる。

以上の手法に基く著者の解釈は、「有・無・成」、「反省」、「仮象 (Schein)」をはじめ、いくつかの「反省諸規定」、「否定」、「因果性」、「概念」等の分析に駆使されており、いずれも興味深いものである。そのほかにたとえば、「矛盾」を五種に区別した箇所 (S. 127) も簡潔で正当である。しかし、概念論の叙述において、「二重の否定」を本質論に、「三重の否定」を概念論に対応させるのは、それ自体としては興味深いが、ヘーゲルはあくまでも本質論に「第一の否定」、概念論に「第二の否定」、「否定の否定」を対応させているから、これは解釈というよりも改釈であろう。

「論理的」立場からの著者の解釈は、かなり適格にヘーゲルの論理をとり出しており、その意味でヘーゲル論理学の解釈の水準を一挙に高めたと言えるのではないだろうか。著者の師であるヘンリッヒも「反省」について詳論しているが、的はずれな点が多く、著者の理解はヘンリッヒをはるかに抜いている。以下、著者のヘンリッヒ批判を二点にわたり扱いたい。

著者は「本質」について論じた箇所ヘンリッヒを批判している (S. 236)。ヘンリッヒは、「直接性」(有論の直接性) と「直接性」(本質論の直接性) を区別し、後者は前者からの「意

味転位」により生じた、と主張する (彼はいくつかの論文でこのように「指標」を使用したり図式化している)。これに対して、著者は、ヘンリッヒがヘーゲルの論理の意味を誤解していると批判する。ヘンリッヒは有論と本質論を何か独立の二つの論理学のように外的に区別したうえで「直接性」から「直接性」への「意味転位」を語るわけだが、著者は、両方の「直接性」を論理学全体のなかで考えるべきであり、この場合、両者はともに根本的に「自己関係 (Beziehung auf sich)」として捉えられるべきだ、と主張する。そして、「直接性」は「直接性」¹との連関においてはじめて (相対的に) 自立した意味をもつと指摘される。たしかに、有論の直接性は、本質論からは、本質に媒介された現象としての直接性と捉え返されるのであるから、この批判は正しいと言えよう。

さらに著者は「概念の論理構造」に関連して、論文「ヘーゲルの反省の論理」全体にみられるヘンリッヒのヘーゲル論理学観を批判する (S. 250)。ヘンリッヒは「反省」をヘーゲル論理学の中心にする。しかし著者は、「反省」としての本質ではヘーゲル論理学の統合の中心がまだ問題にならず、概念論がヘーゲル論理学の中心だ、と主張する。ヘンリッヒは、概念論にみられる発展の論理を捨象し、「概念」の三重の自己規定的否定」を考慮に入れないのである。以上の著者の主張に賛成したい。著者自身も「反省」の重要性を認識しているのだが、ヘーゲル論理学の展開のなかでの最高の立場はやはり概念論的な

である。概念論ではじめて「発展」がとり扱われ、自由が論ぜられるのである。

* Vgl. D. Henrich, Hegels Logik der Reflexion, in: Hegel-Studien/Beihft 18, 1978.

V

本書のC「論理的論述」では、おもに『資本論』とヘーゲル論理学の関係が論ぜられる。ヘーゲル論理学を「社会倫理学」として読むという著者の立場が本章に集中的に現われている。上述のように、著者はヘーゲルとマルクスを貫く『間主體的関係の論理学』という問題連続」を重視した。この視点から、「ヘーゲル論理学とマルクス経済学批判は二重の、交互的な制約関係に立つ」(S. 160)と主張される。第一に、ヘーゲル論理学はマルクス経済学批判に対する「規範的前提 (die normative Voraussetzung)」になり、そのさい、後者は体系的経済学であると同時に既存の経済学的体系の批判でもある。第二に、ヘーゲル論理学の中心にある「転倒」——矛盾の生成と解消——が負う現実的な条件をマルクス経済学批判が示す。以上の視点は興味深い。だが、ヘーゲル論理学をマルクス経済学批判からのみ直接根拠づけようとすれば、自然弁証法、思维法則としての論理学の問題が脱落するのであるが、ヘーゲル論理学はたんに経済学批判の論理以上の内容を含んでいることを指摘しておきたい。そしてまた、ヘーゲル弁証法といえども、若きマルクス、見田石介氏が批判されたような不十分性——そ

れはヘーゲルの観念論的基盤と密接に連関する——をもつたから、そのままでは「規範的前提」になりえないということも付言した。

ついで著者は「ヘーゲル・マルクスの「本質-仮象関係 (Wesen-Schein-Relation)」にも注目する。マルクスは社会構成体の存在が自己自身の否定として現象することを示したが、そのさい、(1)仮象にとってそれと区別される本質が根底にあり、(2)本質が存在するということは自己自身の反対として現象するという、「二重の内包関係」があり、それゆえ、(3)現象に対して仮象の自立性が帰せられるのである (S. 163)。このようにして、著者は、「本質-仮象関係こそ、マルクスの社会構造的な商品物神崇拜理論の根底にあるものだ」(ibid.)と結論する。以上の「本質-仮象」論には賛成すべき内容があり、マルクス疎外論もこの視点から展開すべきである。

著者は資本の自己矛盾的性格にもマルクスに即しつつ言及するが、これはすでに見田石介氏が展開されたものであり、正當なものである。まず『資本論』に即して、資本が「過程の包括的主体」、「過程的実体」だと指摘されたあと、「資本は、ヘーゲルの本質論理の手段でもって思维される。かの『自立的主体』になる」(S. 165)と主張される。なぜだろうか。資本は、体系的な「主体と客体の転倒」であり、社会的な生産諸規定の物化であり、そして生産の物質的基礎の主体化だからである。そしてさらに、資本は以下の矛盾をはらむからである。つまり、特殊なものである資本は、全体である価値形成的労働を自己

自身の契機とすることによって自らを全体として現わすのであり、資本の過程的な自己関係のなかに「内的偶然」の自己破壊的可能性が存在するからである。それゆえ、資本は自己矛盾的、自己否定的存在であり、逆にまた、資本化された労働は欠陥のある間主體性なのである。

「客観的論理学」は物化された事物の、あるいは疎外された思考法にかんする(批判的)叙述であり、とくに本質論では、「自己矛盾」、「循環」、「転倒」等がテーマ化されている以上、前述の指摘は正当性をもっている。そしてさらに、著者はヘーゲル論理学と『資本論』の体系的連関にも言及する。著者は全体的に有論に単純商品生産を、本質論に資本制的生産を各々、対応させる。そして「質」に使用価値を、「量」に価値、交換価値を、「度量」に貨幣を、「没度量(Maßlosigkeit)」、「悪無限」に貨幣流通を各々、対応させる。そのほかにもいくつかの興味深い論点があるが、最後に、社会倫理学の観点から「愛と承認の相補関係」(S. 191)について語っていることを紹介しよう。著者によれば、承認関係は、愛によってたんに動機づけが与え

られるだけでなく、それによってはじめて可能になる。というのは、愛なしの承認は疎外の可能性を含んでおり、逆に承認なしの愛は暴力であり、他者の統合性の毀損であるから。そして、『精神現象学』の承認には愛の契機がなく、この点で論理学との区別があると指摘されている。

C章の展開は全体としてスケッチ的なものであるが、きわめて魅力的である。ただし、「論理外的」にヘーゲルを分析するとなれば、ヘーゲル自身の「实在哲学」的著作——『精神現象学』、『法哲学』、『歴史哲学』、『自然哲学』等——とヘーゲルを証法との関連をさぐる必要がある。また、ヘーゲルを現代に生かすとなれば、たんにヘーゲルとマルクスの連続性を主張して「ヘーゲル・マルクス主義」を説けばすむものでなく、現代科学の立場からヘーゲルもマルクスも批判的に撰取することが必要ではないだろうか。

* たとえば、見田石介「ヘーゲル論理学と『資本論』」、『著作集』大月書店、第一巻、一九七六年所収を参照。
(一橋大学助教授)